

研修所トピックス<2>

心を揺する鬼太鼓



研修所の修了生に会いたければ岩首の祭りに行けばよい！
 今年は宵宮の為に、盛岡市の黒川さんさ踊り保存会の方々も
 来島され、いつもの年より懐かしい顔がたくさん集まりました。
 研修生がふるさと、と感じる柿野浦や岩首の鬼太鼓。今
 回はお付き合いの古い岩首の皆さんをご紹介します。



岩首鬼太鼓の方々から研修生が鬼太鼓を
 教わるようになったのは、一九九五年から
 である。それまでは、前身の鬼太鼓座当時
 にご縁あって数人の方に教えに来ていただ
 いたことがあったり、何といても岩首出
 身のスタッフ、津久美のご実家に呼ばれて
 皆でご馳走になり、観客としての祭りの楽
 しさを毎年味わわせてもらっていた。研修
 所が岩首地区に移ったのを機に、生活の中
 に息づいている芸能、その地域で大切に伝
 えられているものを全身で体感したくて、
 それ以来、毎年の祭りの稽古に参加させて
 いただいている。

師匠たちは、地元の若者に対するのと何
 ら変わらず、熱心に鬼を通していろいろな
 ことを伝えてくれ、踊りを教わるだけだと
 思っていた私達の心を大きく揺さぶって
 くれるのだった。今年も祭りの日には、十三
 晩、親身に教えてくださった気持ちに答え
 るだけの思いで、ただ必死に鬼を打つ一年
 生の顔があった。しかし、皆さんの親心で
 何度も打たせてもらっているうちに、緊張
 していた気持ちと身体はほどけ始め、いつ
 のまにか、ここにいないのにいないような
 全身がしびれるような、喜びに包まれてい
 る。

あつたかいわくび

文：一九九六年度研修生 座間佳子

「頑張れーおめえが倒れたら祭りには続けれ
 んようなるんだからな」

祭りの日、面をつけた鬼打ちの息が上
 り、面の下からこもった荒い息の音がきこ
 える。肩に担いだ鬼の腕が前にも増してず
 つしり重く感じる。踊り続け、足がけいれ
 んさえている。そんな若い鬼打ちを岩首
 の人たちは熱く励まして励まして励ましに
 くる。鬼打ちは主役なのだ。

子供たちは踊り終えた鬼の腕をとり、う
 ちわで扇ぎ、とにかく鬼のそばに居たがっ
 た。小さい頃から鬼打ちに憧れている。今
 年の祭りで面をつけた若者も小さい頃から
 そついった子供だったそう。昔の写真を
 見せてもらうと、見覚えのある五、六歳の
 男の子が鬼にびつたり寄り添ってうれしそ
 うにしている。

子供たちは踊れる年齢になるとまずは老
 僧を踊り、自分をアピールすることから始
 まる。それが年長者の目に留まれば鬼にな
 れるといつ訳だ。そつやうて鬼になれた者
 は「他の者に鬼を打たせたくない。それじ
 やあ納得できない」という強い強い思いが
 ある。踊って踊って踊って踊り尽くして、
 見守ってくれていた者たちにかかえられて
 踊り終える鬼打ちは名譽ある英雄なのだ。

やはり岩首にも島を離れていく若者がい
 る。だが祭りが近くなると、耳元で「ド
 ンチンドン、ドコドンチンドン…」と太鼓が
 鳴る。どんなに離れたところに住んでい
 うとも太鼓は鳴る。そして祭りの日、みん
 な岩首へ帰って来る。都会へ行った者が
 少々かっこつけて古里に戻ってくぬ。そつ



やうて都会へ出て行った者でもまた、若衆
 として祭りに参加できる。やりたい者が参
 加する。そしてよそ者の私たちも…。それ
 が岩首の祭りの魅力だ。そんなあつたかい
 祭りが、あつたかい岩首の人たちを作りあ
 げているのかもしれない。

神社でのお籠もり。お酒に酔いつぶれ、
 獅子の布やハッピを布団がわりにみんなバ
 タバタと寝てしまふ。それを見て年長者は
 「これでいいんだ」と言ふ。「寝てしまつて
 いても、みんなが居れば淋しくないからな
 」と微笑む。「祭りは楽しくなけりやいな
 いよ」とお籠もりの一時間おきに打つ太鼓
 を打ちに行つた。本堂につれしうに三時
 の太鼓を打ちに行つた。

岩首の祭りが好きなのだ。

(一九九六年度研修生調査ノート)

「岩首鬼太鼓の世界」より